

# 船の女の子

小笠原幹夫

神田生れのわたくしは、越境して室町（三越前）の小学校に通いましたが、この小学校で忘れられない女の子がいました。

その子は六年のとき転校してきました。名前はミワコ（どんな字か思い出せません）といました。ミワコさんは、けっして人形のように美しい少女ではありませんでした。色はたしか黒いほうだったでしょう。骨太で丈夫そうな身体をした大人びた娘で、子供ながらもなんとなく、田舎めいた野蛮な色気を感じさせる子でした。

彼女の家は「船」でした。外濠そとほりに船をもやい、そこで生活しているのです。水上生活者の子供たちが通う学校は、深川と月島にありましたが、日本橋や神田の学校にそういう子供が入学するのは、めずらしいことでした。

室町を流れる日本橋川は、一石橋から築地川につづいているので、いろいろな運送船が往来していました。砂利、石炭、塵芥ごみ、おわい、酒樽、米俵、鉄材などが伝馬船や達磨船だるませんで運ばれてきて、船頭さんの家族一家が荷物とともに

に外濠に入ってきてきます。

堀の石垣には段があつて降りていけるようになっていて、そこに団平船だんべいぶねが数隻舫もやつてありました。おかみさんが艫ともで七輪に火を熾おこして鯛を焼いたり、ヒモのついたバケツで水を汲み上げて洗い物をしたりしていました。船尾の方が住居になつてゐるらしく、そこに縄を張つて洗濯物が干してあります。その洗濯や炊事の様子は、岸辺から見るとままごと遊びのようで、船上や岸辺を駆けまわっている子供たちも愉しそうに見えます。

むろん水の上での生活はきびしく、船頭さんたちの生業なりわいは苦勞いっぱいだったでしょうが、陸おかの子供たちにとっては水上の暮らしが、面白そうに見えたのです。

こういう小運送船は、大川に出てから荒川河川敷や房総方面へ仕事に行ったり、また、東京湾は遠浅のため、大型船が岸に直接停泊できませんので、沖の大型船から荷を小分けして岸に運んだりします。仕事場はしょっちゅう変わりますので定住地がありません。

船頭さんは、舳先へさきで竿をあつかひ、船べりを歩いて行くように、身体全体で船を押していきます。船は、意外なほどの速さで堀の水の上をすべつて築地川に出ます。そこからポンポン蒸気の曳き船に繋がれて海へ出ていくものもあります。

船頭の子は小学校在学中だけ陸おかのどこかの家へ預ける場

合もありますが、近距離定路の船は朝に出発して、夕方になると外濠の一定の場所に船をもやい、そこで煮炊きをして夜を過ごします。つまりミワコさんが学校にいる間、「家」は外濠から姿を消して、夕方にならないと荷を降ろした船は戻ってきません。だから彼女は放課後も時間つぶしに運動場でひとり遊んでいたり、外濠の常盤橋あたりをうろうろしていました。

ある日、学校から帰るとすぐにわたくしは焼芋屋に使いにやらされました。そのころの学童たちのおやつは、判で押したように焼芋でした。焼芋といえば、輪切りのようにしたお芋を、大きな鉄の、平らな浅い鍋とも釜ともつかないもので蓋をして焼いたものです。焼芋屋のおじさんが、ゆつくりと蓋を取ると、ぱつと熱い湯気が顔にあたります。おじさんは、手に塩と胡麻ごまを持っていて、ならべてあるお芋の上にはぱらぱらと振りかけます。

その日も今川橋の焼芋屋に岡持ちをぶらさげて行って、買った芋をその中に容れ、店の外へ出ると、おさげ髪のミワコさんが毛糸のセーターのポケットに両手をつっこんで立っていました。アスファルトの上には、落ちていた紙屑が一つところに集まって、冷たい風に渦を巻いています。寒いのに、彼女のつんつるてるのスカートから出ている長い脚あしには、靴下もはいていません。霜焼けで赤紫色の頬つぺたをしています。わたくしは可哀そうに思って、

「お父つあんの船、まだ帰ってこないのかい？」

「うん」

焼き芋を三つばかり出して、

「腹が空いたろう。やるよ」

とすすめると、彼女は真っ黒に汚れた両手で、ひったくるようにして受け取り、

「ありがとう」

と言つて、にやりと笑いました。きらりと糸切り歯を輝かせたように思いますが、五十年前のことですからそのへの記憶は確かではありません。

照れくさくなつたわたくしは、いきなり

「あばよ！」

と叫ぶと駆け出しました。

しばらく行って振りかえって見ると、しよんぼりと佇たちつくしたままわたくしを見送っていた女の子の、哀れでいじらしいようす――。ありありと今も思い出されます。

船の女の子は、次の新学期にはもう教室に姿を見せませんでした。